

農林水産政策研究所だより

Primaff News

VOL.9 平成20年4月28日発行



第3回再生可能エネルギー国際会議(WIREC2008)に参加して



図書館の特殊コレクション ―エイメリー文庫―



― 六義園のしだれ桜（高さ13m 幅17m） ―

第3回再生可能エネルギー国際会議 (WIREC2008) に参加して

農林水産政策研究所次長 渡部 靖夫

3月4日から6日まで、ワシントンD.C.において、米国政府主催の再生可能エネルギー国際会議 (WIREC2008) が、約200カ国から8000人余の参加者のもとに開催された。この会議に、本省環境バイオマス政策課古城国際専門官と伴に出席してきたので、会議の概要を報告する。

1. WIRECとは

WIRECは、2002年ヨハネスブルグの持続可能開発サミットで提唱された再生可能エネルギー促進のための国際会議である。各国から関係閣僚（外務、エネルギー、農業、環境等）、関連企業の経営者、NGOの代表者、学識経験者等が一堂に会して①農業と農村開発、②技術・研究開発、③市場導入・展開の主要テーマに分かれて議論、それらを踏まえて行動計画の採択、各国からの自主的な行動約束の提示が行われる。関連成果・情報はすべてウェブサイトで公開され世界各国で共有される。これまで、2004年にボンで第1回会合、2005年に第2回会合が開催された（次回はインドで開催されることが決まっている）。

（WIRECのホームページアドレス http://www.wirec2008.gov/wps/portal/!ut/p/_s.7_0_A/7_0_2B1?navtype=WM&navid=WM_HOME）



— The Washington Convention Center —
（WIREC2008のホームページより）

2. 注目された要人の発言

（ブッシュ大統領）

9月に同じくワシントンで開催された主要経済国会合に引き続いて、生のブッシュ大統領の演説を聴く機会を得た。主要経済国会合が各国政府関係者のみの出席であったのに比べ、今回は民間人の出席者が多かったせいもあろう、随分リラックスした感じを受けた。昨年末に懸案のエネルギー法を成立させたことも自信に満ちた態度の背景にあったかもしれない。

それにしても、この人のバイオ燃料にかける意気込みには驚嘆させられる。一国のエネルギー安全保障政策上、再生可能エネルギー特にバイオ燃料は最重要であると強調し、原稿を一瞥もせずに、あたかもどこかの役所の担当課長並みに細かい数字をそらんじていた。とりわけ木質系原材料のスイッチグラスは大のお気に入りのようだ。次期大統領が果たしてブッシュ並みの熱意を引き継ぐのであろうか。興味深い。



— 演説中のブッシュ大統領 —

(シェーファー米国農務長官)

「バイオ燃料は、再生可能エネルギーとしてすばらしい可能性を持っており、農業生産に良い影響を与えている」とする一方で、「(バイオ燃料は)長期的には補助金依存体質から脱却しなければならない」、「バイオ燃料作物はエネルギー利用と食料利用とのバランスをとることが大切だ」と述べていた。最近のバイオ燃料需要の急増と食料価格の高騰を意識しての発言とみられる。

(コナー米国農務副長官)

「最近の食料価格上昇は、バイオ燃料原材料需要増が主要な要因ではなく、食料そのものの需要が増加していること、原油価格高騰が(原材料費以外の部分での)コストアップや資金投機等様々なかたちで影響していることなどによるものだ。」と、こちらは長官よりもやや強気の発言であった。

3. 地域経済開発セッション(パネリストとして参加)

会議はいくつかのセッションに分かれて話し合いが行われたが、私は再生可能燃料と地域経済開発に関するセッションにパネリストとして参加する機会を得た。この中で私からは、我が国がバイオマスニッポン総合戦略に基づきバイオ燃料政策を進めていること、地域ごとの事情にあわせたプログラムとしてバイオマスタウンを進めていることを説明した。また、食料との競合問題には極めて大きな懸念を持っており、我が国は食料と競合しないセルロース系原料の利用・研究開発を積極的に進めていくこと、バイオ燃料の研究開発成果は発展途上国に積極的に普及していきたいとの方針も併せて表明した。

議論は、発展途上国において再生可能エネルギー生産と地域開発への取り組みをどう関連づけ進めていくべきかに集中したが、私からは、発展途上国においても、我が国が取り組んでいるように、地域ごとのコミュニティ機能を十分に発揮させるようなプログラムが重要ではないかと述べた。フロアーからは、米国や日本などの先進国から再生可能エネルギーに関する支援を積極的に行うべきではないかとの意見も出されていた。



— パネリスト(左端が筆者) —



— 説明中の筆者 —

図書館の特殊コレクション —エイメリー文庫—

エイメリー文庫は、G. D. Amery氏(1890-1955、イギリス農務省を経てオックスフォード大学講師)の没後に売りに出された同氏の蔵書2,403冊を、農業総合研究所が昭和32年に古書店から購入したものです。その大半は、17世紀から18世紀前半のイギリスを中心とするヨーロッパ諸国の農学、社会、経済、歴史等の分野の図書で占められています。

当時の次長で、図書購入予算の獲得等に尽力された加用信文氏(農林省統計調査部経済調査課長、東京教育大学教授等を歴任)が「総研三十年」(昭和51年刊)に“エイメリー文庫のことなど”と題して、貴重で特殊な蔵書であることを述べられていますので、その一部を抜粋して紹介します。

“蔵書一切がイギリスから到着して目録を見ていくうちに、大変な幸運が転がりこんできたことが分かった。まず、エイメリー氏がアーサー・ヤングの考証家だけあって、ヤングの著述および刊行誌がほとんど揃っていたのは当然としても、有名なタルの「馬糞農業論」の1733年版以降の各版およびコベット版まで揃っているのは驚きであった。さらにロード・アーナルやシーボウムなどの英国農業史には多くの古農書文献が利用されているのを知っていても、それまではイギリス本国でも留学しなければ、とうてい原物に接することはできないと諦めていたものが続々と現れてくるし、しかもこれらの著述にも見かけない珍しい文献も混ざっていたのは、大きな喜びであった。”

(創立三十周年記念出版 総研三十年 p.25-30より抜粋)



— エイメリー文庫 —

[図書館からの一言]

3～4世紀前の図書が大半のため、装丁の破損や酸性劣化が悩みの種です。

編集後記

新しい年度がスタートしました。秋には霞ヶ関への移転を控え、何かと慌ただしいこの頃です。

表紙の写真は、当研究所から程近い六義園の「しだれ桜」です。夜桜放映の定番スポットとなっていますが、自然光で愛でる姿も見事なもので、多くの人たちで賑わっていました。

(3月27日撮影)

Primaff News

— 農林水産政策研究所だより —

VOL. 9 平成20年4月28日発行

農林水産省農林水産政策研究所

企画広報室広報資料課

TEL : 03-3910-3809

※バックナンバーはHPをご覧ください。

<http://www.maff.go.jp/primaff/koho/seika/news/index.html>

